

毎日歌壇

米川千嘉子 選

特典も制約もあり性別を決めて始まるRPG

宮崎 門田 祥子
 〈評〉ゲーム内のキャラクターとして冒険や戦闘をするロールプレイングゲーム。

性別による「特典」「制約」の語に批評がある。八歳に母手作りの田植簪と涙でぐっしり濡れし
 行田市 永沼規美雄

〈評〉約70年前の光景。当時の生活や労働、親子のことを様々に伝えて感慨深い。

十字切り茅の輪をくぐる異国の入夏越の空に夕月浮かぶ
 大阪市 辻井 康祐

追憶に封じたままの小さき愛忘れたつものりつものに迷ふ
 春日市 林田 久子

「四〇〇人待つのですか」と区役所の番号札とる人の声しつ
 東京 井芹 純子

こんなにも多くの薬に支へらる 私ではなく働き盛りの娘
 伊丹市 岡本 信子

無人機でリモート勤務しませんか戦歴不問臆病者可
 京都市 寺西 和史

良く走りきつちり止まれと願ひ込め蹄鉄型のブレーキランプ
 久留米市 春日 登

バスの中必ず訊かれ当惑せり「どこ行きはりますねん」の人逝く
 生駒市 奥田 充子

昆虫記続編なだりファールに手紙を書いた小四の夏
 上尾市 関根 裕治

加藤 治郎 選

停戦の日は晴れわたり星たちが語り合うのをながめる兵士
 兵庫 廣澤 真希

〈評〉兵士たちの実感を想像し停戦の日をイメージした。美しい情景である。その日も戦場にいる。思ひは解き放たれるのだ。

ティーカップこんな小さな湖へ亡母の便りの花のひとつ
 東京 風ノ桂馬

〈評〉ひとひらの花を母の便りと感じた。小さな湖が見えてくる。哀切な歌である。

この胸の底に眠っている夢を起さずにおく視線を上げる
 四万十市 佐竹 紫円

ワッフルを食べる心地で空を見る よければ明日会いませんか
 奈良市 古井さらさ

好きでした ポップコーンは弾けとびあまい涙をなめる夕暮れ
 春日井市 月夜の雨

反射する蓮河の光ひとつひとつを取り出すように忘れてね
 名古屋 市 田中 裕一

ベランダは少し斜めになっていることをいまだに感じられない
 大津市 佐々木敦史

閉園の動物園の動物が還る家から見える地平線
 川崎市 新井 将

歯並びがきれいですねと月光が夏へと変わる五月の夜に
 宮古島市 塩見 伴

間違ひじゃないよ君のオノマトペ私の耳に春のしやしらしら
 鳥取市 中之島 潤

水原 紫苑 選

理不尽がころがっている山道で驢馬が零した涙は水晶
 札幌市 橋 晃弘

〈評〉キリストはロバに乗ってエルサレムに入城した。ロバとは何か。詩のリアリティーを思う。

沈黙も発話のひとつ 絹製の湖面をふたり見つめて
 名古屋市 田中 裕一

〈評〉湖のささなみ、その光や空気が伝わる。それだけで一首は詩の空間になる。

触ってもレプリカだからいいですと学芸員が手渡す化石
 倉敷市 中路 修平

芍薬は初夏の門番それぞれの旅路に深い敬意を示す
 松本市 飛 和

うつぶせで目覚まし時計へ手を伸ばすもう地球から滑落しそう
 四日市市 早川 和博

右を向く兎が貼りつく月の貌ロールシャッハの図版に似ており
 所沢市 里見 脩一

星売りの少年は声かけられて振り向く 雨のやまない晩に
 雲南市 熱田 俊月

さらさらと瓶のかたちに落ちてゆく焼き塩はこんなに素直なり
 春日井市 長谷川径子

真夜中に会えはふたりは双子果の桜桃よりも篤く契った
 千葉市 星野 珠青

茂り葉のあわいに病めるマクノリア狂い咲きとは時への奇襲
 東京 石川 真琴

伊藤 一彦 選

白桜忌誰かが戦に行くことを誰かが止める世の中であれ
 千葉市 佐藤 綾子

〈評〉白桜忌は与謝野晶子の命日。晶子の「君死にたまふことなかれ」を作者は改めてかみしめる。もっと論じられていい詩だ。

クレームを華麗におさめる役をやる 私は女優 オフィスは舞台
 大垣市 松田早百合

〈評〉「華麗に」と言うが、きつと冷静にしっかりと対応し成功しているのだろう。

デカダンス過去の遺物と思いきや自己愛強く拝金主義へ
 神戸市 前田 達生

授業後に学校横付けマイクロバス児童吸い込み塾へと運ぶ
 川崎市 佐久間喜賢

気を取れば退化しそうになる思考ひきしめ見つめるネットの世界
 奈良市 久保 祐子

ひとつひらの手ばかりもなく文様を葉に施せる羊歯のしずけさ
 東京 富見井高志

古希近き母とコアラを見てをりぬボッケのやはらかさ思ひつつ
 横浜市 谷口 菜月

片栗粉ずつと出番を待ちをりぬ冷蔵庫の奥白く光りつ
 横浜市 千々岩 清

鍵穴の思ひ出せない鍵ばかり 閉じ込めしもの置きざりしもの
 堺市 門哉 慧遙

調律の狂ったピアノを奏でたら風邪ひきのような鼻声ひびく
 相模原市 榎本 ハナ

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住所不要) 毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句

は「毎日俳壇」、〇〇先生(希望選者名)係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム(<https://mainichi.jp/kadan-haidan/>)でも受け付けています。他媒体との二重投稿や、同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁で

す。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開し、本社が作成または許諾した出版物やメディアに掲載することがあります。